

「現代イラク研究国際学会」の動向

山尾 大*

現代のイラクは、中東地域の政治変動、さらには国際政治を考える上でも極めて重要な位置にある。とりわけ 2003 年 4 月のイラク戦争以降のイラクは、国内問題のみならず、それが地域・国際的な問題に極めて強く連動しているという点でも、その重要性はいくら強調してもしすぎることはない。

このような現代イラクの理解を深める目的で、2005 年に設立されたのが、「現代イラク研究国際学会」(International Association of Contemporary Iraqi Studies) である。同学会の発起人には、学会・研究サークル運営の中心人物である政治学者イスマール (Tareq Ismael) 教授 (University of Calgary, カナダ) をはじめ、地理学者のメイヤー (Gunter Meyer) 教授 (University of Mainz, ドイツ)、気鋭のイラク史家アブドゥッラー (Thabit Abdullah) 教授 (York University, カナダ)、エジプト政治の分析や同国のイスラーム政治運動に関する議論で有名なベイカー (Raymond Baker) 教授 (Trinity College, 米国)、中東政治史が専門のデイヴィス (Eric Davis) 教授 (Rutgers University, 米国)、ハヤート紙 (Dār al-Hayāt) の論説委員ハドゥーリー (Walid Khadduri) 氏、中東諸国の社会経済を専門的に論じる経済学者のナスラーウィー (Abbas Alnasrawi) 教授 (University of Vermont, 米国)、我が国からはイラクを含めた中東イスラーム政治論 [小杉 1994; 2006] を展開する小杉泰教授 (京都大学) らの錚々たるメンバー 17 人が名を連ねている。

イスマール教授は、湾岸戦争が中東地域と国際関係に与えた影響を多角的に論じた論文集 [Ismael and Ismael 1994] を編纂するなど、北米を中心に活発に活動している。また、歴史家のアブドゥッラー教授は、『イラク小史』などの手堅い歴史研究で有名であり [Abdullah 2003]、近年は現代史も著している [Abdullah 2006]。発起人のひとりであるデイヴィス教授は、バース党政権をはじめとするイラクの歴代政権が、歴史的シンボルと記憶をどのように「国民統合」に利用していたかという、いわば記憶のポリティクスという社会学的な分析視点を持ち込み [Davis 2005]、イラク政治研究の発展に大きく貢献した。いずれのメンバーも、イラクや中東地域の政治・社会・経済・歴史研究の最前線で活躍する研究者である。

同学会の創設大会は、2005 年 9 月 1-2 日に英国の東ロンドン大学 (University of East London) で開催された。国外の大学で教鞭を取る亡命イラク人を中心に世界中からイラク研究者が集結し、17 のセッションに分かれて活発な議論が交わされた。集まったメンバーの多くは、イラク戦争後祖国に帰還して学術的に活躍することを望んでいたという。しかし、戦後の占領統治政策が綻びを見せ、徐々に治安が悪化していく中で、その希望の果実は実らなかった。そこでロンドンでの開催という運びになった。報告者も、新たなイラク研究の息吹に触れるために同大会に参加した。若輩にもかかわらず、多くのイラク研究者と意見を交換することができた。それは、イラク研究に対する「熱い」思いを共有できたからであろう。以下に主要なセッションのテーマを挙げる。

はじめに注目すべきは、「イラク国際大学」(The International University of Iraq) の創設構想が議論されたことであろう。イラク人の学者に加えて、世界中からイラク研究者を集めて、人権や市民社会の問題にかんする研究プロジェクトを進める計画で、これまでのイラク研究の中では画期的で

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

日本学術振興会特別研究員 (DC)

興味深い。しかし、米国占領政策の長期化と復興の頓挫が顕著になり、最近では治安状況が急激に悪化するなかで、実現が危ぶまれている。

さらに、米軍占領下の法整備、占領に対する文化的抵抗、メディア問題、戦後の政治・経済問題、教育問題など、2003年のイラク戦争後の政治・社会・経済的問題にかんするセッションが多く見られた。また、政治とジェンダーをめぐる問題、文化・アイデンティティーをめぐる議論もいくつかのセッションで見られ、幅広い問題に対する関心を目の当たりにした。

2005年の創設大会において、議論の中心のひとつとなったのは、湾岸戦争以降に米・英両国主導で行なわれた経済制裁にかんするものであろう。とりわけ、制裁政策を実施した英国と国連側の元責任者・関係者と、その政策に反対して国連を辞任した人物を招いてのセッションは、極めて活発な意見交換の場となった。責任の所在を明らかにするという趣が強かったことは否めないが、おおむねイラク国内の経済状況の推移などのデータを駆使して実証的議論を展開する、学術的な報告となっていた。

イラク戦争とそれに続く占領政策が混迷を迎える中で、やはり多くのセッションが各国のイラク政策、なかんずく湾岸戦争以降の米国のイラク政策にかんする議論に割り当てられていた。「食糧のための石油」プログラムにかかわった元国連人道責任者のスポネック（Hans von Sponeck）氏が、経済制裁にかんする議論において、1920年代の英国の統治政策に言及していたことから、イラクで発生する様々な政治・社会的問題が、半世紀以上経過した現在もなお、植民地主義的な暴力と不可分な関係にあることを再確認させられた。

この創設大会の最大の収穫は、現在の国際社会のイラク政策が、リベラリズムの名の下に平等主義を掲げながら、「法の外」を作り出してそれに対する暴力を正当化していく「構造」を温存していることを、我々に考えさせてくれたことであろう。南北格差に象徴される国際社会の歪みを放置したままネオ・リベラリズムを世界規模で一貫させ、そこから発生する混乱を軍事的・司法的干渉の形で事後的に押さえ込む現在の権威主義的潮流が、イラクに典型的な形で表出している。これは、土佐弘之が「アナーキカル・ガヴァナンス」と呼ぶ状態に他ならない[土佐 2006: 129]。イラク人は、このような現代政治の「構造」によって排除あるいは差別されているのである。これは決して感情的な議論ではなかった。現代の国際的・地域的な政治・社会の歪みと矛盾を映し出す、すぐれてアカデミックな問題提起である。

その一方で、戦後イラク政治の中枢に台頭したダアワ党やイラク・イスラーム革命最高評議会（SCIRI）を中心とするイスラーム政党にかんしては、報告がまったくなかったことが惜まれる。これにかんしては、第1に、イラク戦争後の米国の対イラク政策の現状を見極めることが緊要の課題となっていたこと、第2に、これまでバアス党政権に注目が集中していたため、イスラーム政党にかんする研究はまだ開始されたばかりであること、の2点が要因として挙げられるであろう。このテーマは今後の課題ということである。

同学会のメンバーが2回目に参集したのが、2006年6月の11-16日にヨルダンのアンマンで開催された「世界中東学会」（Second World Congress for Middle Eastern Studies）傘下、イラク研究のセッションにおいてであった。これは「現代イラク研究国際学会」だけが集まる学会ではないが、同学会の主要関係者の多くが参加し、2つのパネルを出すとともに、メンバーが個人で報告を行った。

ひとつめのパネル・ディスカッションでは、イスマール教授、ペイカー教授などの同学会の中心メンバーに加え、イラクを中心とするシーア派コミュニティの優れた歴史研究 [Cole 2002] を行い、近年、現代イラクのシーア派政治参加にかんする分析も積極的に発表しているコール（Juan

Cole) 教授 (University of Michigan, 米国) などが、戦後のイラク政治・社会をめぐる現状分析を行なった。とりわけ、コール教授によるイラク政治分析は、イラク戦争後に台頭したサドル派の政治的役割の拡大と、それによって複雑化するシーア派宗教界との関係の変節を指摘した論文 [Cole 2003] を下敷きに、SCIRI が南部を統治する連邦制を模索していることを浮き彫りにした興味深い報告であった。これは、SCIRI が最近さかんに主張するようになった、イラクに連邦制を取り入れるという政策を受けたもので、石油や天然ガスをはじめとする天然資源が豊富な南部にシーア派イスラーム国家を形成することを目指す方向に進んでいると分析された。

もうひとつのパネル・セッションは、バグダード大学歴史学部で教鞭を取る在イラク研究者たちによって構成されていたが、地域をめぐる政治と外交の様々な問題で、大会そのものへの参加が不可能となった。同パネルが実現していれば、現在イラク国内で政治・社会的問題がどのように認識され、議論されているのかを間近で確認する絶好の機会になったことであろう。

そして「世界中東学会」の1年後に、第2回の学会大会の開催が決定した。前回残念ながら参加できなかったイラクからの多くの学者を招聘して、2007年6月11-13日にヨルダンの私立大学フィラデルフィア大学 (Philadelphia University) で開催予定である。現在、パネル・ディスカッションや報告の申し込みが相次いでいる。世界中のイラク研究者に加えて、現在日本に招聘中のカイスィー (Maḥmūd al-Kayṣī) 助教授 (University of Baghdad, イラク) をはじめとする在イラクのイラク人研究者なども多数参加を予定しており、文字通り、世界中からイラクを対象とする研究者が一堂に会する。さらに報告の内容も、政治学、国際関係、社会学、政治学、経済学、思想研究、文学、カルチュラル・スタディーズ、ジェンダー研究、歴史学、地理学など、さまざまなディシプリンを含む、極めて学際的な学会になることが予想される。報告者自身も参加し、これまでの研究蓄積を報告したい。

「現代イラク研究国際学会」のこれまでの活動成果の中でもとりわけ重要なのが、学会誌となる国際ジャーナル『現代イラク研究国際ジャーナル』 (*International Journal of Contemporary Iraqi Studies*) の発行であろう。第1号は、2007年の1月に刊行された。編者はイスマール (Jacqueline Ismael) 教授 (University of Calgary, カナダ) に加えて、イラクの社会経済研究の第一人者的存在で、優れた経済史研究 [Mahdi 2002] を上梓しているマフディー (Kamil Mahdi) 教授 (University of Exeter, 英国) が担当する。編集委員には上述の同学会発起人に加えて、コール教授、中東政治経済研究で有名なオーウェン (Roger Owen) 教授 (Harvard University, 米国)、イラク史家のトリップ (Charles Tripp) 教授 (SOAS, University of London, 英国)、気鋭の中東政治学者ズバイダ (Sami Zubaida) 教授 (University of London, 英国)、我が国の代表的なイラク政治研究者の酒井啓子教授 (東京外国語大学) など20人が名を連ねている。インテレクト (Intellect) 社から年に3回刊行されることになっている。

オーウェン教授は有名な中東政治学者であり、中東諸国が社会経済的な基盤を背景に軍隊・政府などの国家機構を強化し、政治的な発展を遂げるメカニズムを詳細に議論した中東政治の金字塔とも言える名著 [Owen 2000] を上梓している。トリップ教授は、イラクの現代史に関する多くの研究があるが、イランとイラク両国の国内政治・経済、外交関係、社会構造との関係に着目してイラン・イラク戦争を分析した研究 [Chubin and Tripp 1988]、パトロン・クライアント関係に焦点を当ててイラクの現代史を簡潔にまとめた労作 [Tripp 2000] も出版され、後者は日本語にも翻訳されている [トリップ 2004]。イラクを中心とする中東諸国のナショナリズムとイスラーム、国家の関係について極めて興味深い分析 [Zubaida 1993; 2002] を行なっているズバイダ教授は、イラク出身の

学者である。世界的に有名なイラク研究者の酒井啓子教授は、社会と政治を分析した多くの論文・著書があるが、バース党政権の巧妙な支配のメカニズムを実証的に明らかにした労作 [酒井 2003] が代表作であろう。いずれの研究者も、イラクに造詣が深い専門家であり、ジャーナルの質の高さが期待できる。

同誌は、最新のイラク政治・社会・経済にかんする論考に加えて、書評なども充実しており、今後の現代イラク研究のスタンダードとなることは疑いを入れない。同学会は、積極的な活動を行っており、イラク研究の今後の新たな知的アリーナになるであろう。イラク研究発展の大きな一歩である。ダアワ党を始めとするイスラーム政党とシーア派宗教界の関係に着目して、イラク政治の分析を始めた報告者も、今後継続して「現代イラク研究国際学会」の活動に積極的に参加していきたい。

参考文献

- 小杉泰 1994 『現代中東とイスラーム政治』 昭和堂。
 —— 2006 『現代イスラーム世界論』 名古屋大学出版会。
 酒井啓子 2003 『フセイン・イラク政権の支配構造』 岩波書店。
 土佐弘之 2006 『アナーキカル・ガヴァナンス——批判的国際関係論の新展開』 御茶ノ水書房。
 トリップ, チャールズ 2004 『イラクの歴史』 (大野元裕監訳) 明石書店。
- Abdullah, T. 2003. *A Short History of Iraq: from 636 to the Present*. New York: Longman.
 —— . 2006. *Dictatorship, Imperialism and Chaos: Iraq since 1989*. London, New Jersey: Zed Books.
 Chubin, S. and C. Tripp. 1988. *Iran and Iraq at War*. Boulder: Westview Press.
 Cole, J. 2002. *Sacred Space and Holy War: The Politics, Culture and History of Shi'ite Islam*. London & New York: I.B. Tauris.
 —— . 2003. "The United States and Shi'te Religious Faction in Post-Ba'thist Iraq," *The Middle East Journal*, 57 (4), pp. 543-566.
 Davis, E. 2005. *Memories of State: Politics, History, and Collective Identity in Modern Iraq*. Berkeley, Los Angeles & London: University of California Press.
International Journal of Contemporary Iraqi Studies. Bristol: Intellect.
 Ismael, T. and J. Ismael eds. 1994. *The Gulf War and the New World Order: International Relations of the Middle East*. Gainesville: University Press of Florida.
 Mahdi, K. 2002. *Iraq's Economic Predicament*. London: Ithaca.
 Owen, R. 2000. *State, Power and Politics in the Making of the Modern Middle East*, 2nd ed. London & New York: Routledge.
 Tripp, C. 2000. *A History of Iraq*, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
 Zubaida, S. 1993. *Islam, the People and the State: Political Ideas and Movements in the Middle East*. London & New York: I.B. Tauris.
 —— . 2002. "The Fragments Imagine the Nation: The Case of Iraq," *International Journal of Middle East Studies*, 34 (2), pp.205-215.